

ブレジネフ時代

上 島 武

1. はじめに

ソ連崩壊後もソ連・ソ連史研究は進行している。わが国では若干の停滞が認められるけれども、英語使用圏からは毎年いくつかの注目すべき研究書が現れている。中にはソ連崩壊という巨大な事件をひろびろとした歴史の枠組みの中に置き、改めてソ連とは何であったかを問おうとする力作も珍しくない。2002年に出たE. ベイコン、M. サンドル編著『ブレジネフ再考』⁽¹⁾も、その一つに数えて良いだろう。とかくわれわれは彼とその時代を「停滞」の一語に集約したペレストロイカ期の論調に慣れ親しみ、その真の長短を確定するにいたっていない。むろんそれはこの時代に限ったことではないのであるが、これを機に、またそれを新たな考察の契機とすることができるかもしれない。

2. 停滞時代

それにしても、何を好んで今ブレジネフなのか？ 編著者たちがこの疑問を予想しつつ用意した回答は次のようなものと読める。まず第1に、ブレジネフがそこに居た、というのがそれである。しかもブレジネフたるや単に歴史上の人物というにとどまらず、とにかく20年の長きにわたって超大国の一つを率いた人物なのだ、それにしてもな伝記一つ、彼と彼の時代を扱うこれといった研究書一つないのはおかしいではないか、というのが第二の答えである。だが三つめはもっと重大である。彼はペレストロイカ時代、とくにゴルバチョフによって、ソ連を長い停滞に導いた男、最後には危機寸前にまで追い込んだ張本人として非難されるのみであった。しかし、今のロシア人は例の地口で「ソ連を崖っぷちに追い込んだのがブレジネフなら、そこから谷底へ突き落としたのはゴルバチョフ」と言っているではないか。ソ連崩壊に責任があるのはどちらなのだ、それより、ブレジネフ時代は本当に停滞の一語に尽くし得るのであるか？

このように、ブレジネフはおおむね否定的に評価され、学界ではあまり取り上げることのない存在だが、当のロシア人、それも普通のロシア人にとってはそうでない。ここに2000年1月に行われた世論調査の興味深い結果がある。ソ連史上の著名な指導者5人をとって、それぞれをどう評価するかの問いに対し、どちらかと言えば肯定的、どちらかと言えば否定的と答えた人の数

はそれぞれ以下の通りである。スターリンは26対48、フルシチョフ30対14、ブレジネフ51対10、ゴルバチョフ9対61、エリツイン5対72。かくダントツにブレジネフへの評価が高い。むしろ政治家への人気投票がアテにならないのは洋の東西を問わぬ。それは日本の小泉ブーム一つとって見ればわかる。小泉人気に（同じ程度に石原都知事にも）ついて言えることは、民衆が自らのやりどころのない不満・鬱積を、ひょっとして彼らが晴らしてくれるのではないかとの幻想がそうさせているということである。彼らの異常な失言や失態までが、期待の満たされるまでの幕間劇として受けとめられる。民衆はタカの実力を買いかぶっているのではない。いつの日か自らのために——と言ってそれが何を指すのかは不明瞭であるが——発揮されるであろう幻の実力を信じたがっているに過ぎない。これは階級支配を維持、貫徹させる重要な政治的契機の一つである。

むしろ、先にあげたロシアの人気投票にはこれと異なる面がある。スターリンの「得票」は他に比較して、ほとんど賛否拮抗とさえ言えるが、正の評価は疑いもなく彼がソ連の工業化・大国化の象徴として、また過ぐる大戦の勝利者として記憶されていることによる。負の評価が大量弾圧の記憶に由来することもまた疑いない。極言するならば、二つの数字は弾圧の体験（記憶）者と非体験者の比率をそのまま反映している。一方ゴルバチョフ、エリツインに対する酷評は、ソ連崩壊前後に空前の生活苦を味わった人と、そうでない人との比率と言ってよかろうか。或いは超大国からの「転落」を嘆く声がそこに加わっているかもしれない。

そうだとすれば（そうであるに違いないが）、ブレジネフへの寛大さも容易に理解することができる。民衆はフルシチョフ失脚後の逆改革、次第に低下する経済成長率、外部世界における不人気、内政の重苦しさ、そしてブレジネフその人の何やら滑稽なまでに愚かしい言動をかいま見たり、気づいていたりしたものの、とにかく自分たちの日常生活がそれによって直接脅かされたことはない（愛する男たちをアフガニスタンに取られた人々を別にすれば）。また、やがて間もなく脅かされるであろうとも思ったことがなかった。絶対水準はともかく、生活は着実に上昇した。何よりも雇用は完全雇用、それも超完全の状態だった。もっともその実、労働力の不完全利用、或いは別名不完全操業、そして労働力の「流動性」を意味していたに過ぎないのであるが。そしてこれも別名インフレに他ならぬ全般的物不足が支配的であったし、その下で住民の預貯金は、今の日本人ならば羨むほどに増加し続けたが、にもかかわらず物価は安定していた。安定しすぎて数多くの国営企業が計画欠損企業に分類され、人間が口にすべきパンの方が家畜のエサより安いという状況だったのであるが。一方、肝心の経済成長率が一定の上昇を記録したのは事実である。ブレジネフ治世の1964年から82年にかけてGDPは1.5倍になった。ただし、増加分の3/4は1973年までの前半に獲得されたものである。前半の増加率が年平均3.5%だったのにたいし、後半は1%以下、時にマイナス成長を記録する。

これを要するに、ブレジネフ時代を全体として停滞の時代と規定することは必ずしも不当でないにせよ、これと矛盾する状況や要素のあったことを認めないのも不当であり、そこに分析を加

えぬのは怠慢のそしりを免れない。さらにブレジネフ後半期にも僅かながら成長は持続していたし、何よりも、後継者アンドロポフの短期政権下で規律引き締めの効果があったことも見逃すことはできない。総じてゴルバチョフが政権を握ったときの状況を「危機寸前」と規定するのは誇張だったかもしれない。ソ連経済は生命力を枯渇させるには到っていなかったとの主張にも一理ある。この点、畏友・中村平八氏が夙に力説したところである⁽²⁾。とは言え私見によれば、全体としてソ連の経済システム＝集権的物量計画の生命力は枯渇に瀕していたと言って良い。いわゆる引き締めによって一時的に生産量を増やすことはできても、それを持続させる力、まして生産の質（生産性と品質）を向上させる力はなかったからである。なお、前半に記録された「高成長」について、私はその要因が外延的拡大可能性の残存、および、コスイギン経済改革の部分的効果にあると書いたことがある⁽³⁾。ちなみに本書『ブレジネフ再考』の一筆者（M. ハリソン）は、経済改革と経済成長率との連関・逆連関は共に存在しない、少なくとも無きに等しいと断言している⁽⁴⁾。論拠は必ずしも明確でないが、私とて正の連関を論証し得たわけではない。

さらにハリソンは、改革イコール中央統制の緩和と捉え、それが資源の全国的配分に変化をもたらして全体としての効率を減退させ、他方で品不足・高需要財の生産を減らした結果、統制再強化への道を繰り返させることになったと述べている⁽⁵⁾。改革逆行要因の説明として必ずしも納得できるものではない。

いずれにせよ改革と成長の連関を実証することが困難であることは認めざるを得ない。ただ、上記ハリソンと同様、ソ連でも改革反対論の中に隠微な形ではあるが、企業を「不当」なまでに自立化させると高収益品の生産に偏する結果、低収益品すなわち大衆消費財に不足をきたすとの俗論を聞くことがあった。むろん取るに足らぬ弁であり、物品税一つで解決できる問題である。むしろ真の問題はかかる俗論の背後にいかなる物質的・政治的利害が潜んでいたかであろう。総じてソ連経済の非効率性を、ハリソンのようにもっぱら不合理な価格形成方式に求めるのは⁽⁶⁾正しくないと思われる。

3. 黄金時代

意外なことにトロツキー研究家のI. D. サッチャーが本書に寄稿し、ブレジネフ時代は正にソヴィエトの「黄金時代」だったと言っている。

彼はまずロイ・メドヴェージェフの、ブレジネフにとって政権の獲得は柵からボタ餅だったとの説を槍玉にあげる。ロイのブレジネフ批判は確かに手厳しかった。曰く、彼がなぜ書記長にかつぎあげられたかと言えば、他に適当な人物がいなかったからに過ぎない、当時フルシチョフ追い落としの急先鋒といえばスースロフとシェレーピンだった、実際行動を組織的に準備したのはイグナトフとセミチャストヌイである、これらの面々は政治家として、またイデオログとしてブレジネフに数段まさっていたが、そのいずれを書記長に据えても反フルシチョフ集団の内部分裂が避けられなかったろう、だから平穩無事の人、人受けの良さで類のない人、すなわちブレジ

ネフが選ばれたのである、この決定にはたぶん本人が一番おどろいていたかもしれない、云々⁽⁷⁾。サッチャーの反論は次の通り。

否、ブレジネフは優に権謀術数の人であった、フルシチョフの追い落としに全勢力を傾注した、そもそも内外ともに多事多難たる時、ソ連党が安易な指導者選びをしたはずがない、云々⁽⁸⁾。政権に就いたブレジネフは事実、なみなみならぬ手腕を発揮した、とサッチャーは続ける。とくに人事においてそれがきわだっていた。1973年4月の人事にそれを見てとることができる。これによって党政治局は強力な3人の閣僚を擁することとなり、いずれもブレジネフの右腕となった。すなわち国防相グレチコ、外相グルムイコ、KGB議長アンドロポフの面々である。また、彼が次々にライバルを追い落としていったのも、その裏返しの巧みさである。しかもその両面で彼が示したのは、スターリン的な独断やフルシチョフ的な気まぐれではなかった。十分な調整、事前の根回しが先行した。そこには幹部への厚い信頼があった。ゴルバチョフは後になって、ブレジネフ時代に登用された地方幹部が地方太守の趣を呈したと非難したけれども、それは当たらない。彼は地方指導者の声に耳を傾け、彼らの信頼も得、結局彼らに対する民主的リーダーシップを発揮したのである……。ここまでくれば、「再考」を通り越して何やら追従めいた調子を感じとれる。だが、それは一体なんのためだろう。

これに対し、彼の国内政策が堅実であったとの評価には一定の根拠が認められる。何よりも彼はフルシチョフ流の極端主義を嫌った。大規模な政策転換も大胆な行政改革もなかった。そこが一連の改革派から批判される理由だが、逆に、ゴルバチョフのような大改革に乗り出して結局体制崩壊を引き起こしたのに比すれば遙かにマシであるとの説もあり得る。それに彼はそれなりに国民生活の改善に真剣であった。週5労働日制の導入、年金支給年齢の引き下げ、コルホーズ農民への年金支給などがそれである。彼こそすべての国民に職と最低限の福祉を保障した政治家である、双方を台無しにする道を開いたゴルバチョフにくらべてどれだけマシだったことか……。

なるほどそういう面はある。今のロシア人の多くがそう考えていることも先に見た。だから逆に見れば、サッチャーは普通のロシア民衆が抱いているペレストロイカと体制転換後の窮状への恨みを代弁しているに過ぎないとも言える。それはそれとして(つまり事実として)認めなければならぬが、それをもってブレジネフ時代がソ連にとっての「黄金時代」のみならず、ソヴィエト民衆にとってもそうであったかの誤解を許すことは宜しくない。この点、本書の終章で2人の編者が書いていることが大変面白い。曰く、ブレジネフがその前半で収めた経済的成果は、実のところ彼とはまったく関係がない、逆に、後半で記録された不首尾はあげてブレジネフの責任である、云々⁽⁹⁾。ただしこれとて一種の印象批評にとどまる可能性はある。前述の通り、少なくとも経済改革の停滞と経済発展の停滞とを実証的に関連づけることが困難だからである。

ブレジネフ再評価は民族政策にも及ぶ(第4章)。民族問題・民族紛争に火を付け、ついに連邦解体に導いたのがゴルバチョフだったとしても、かかる紛争の火種を蒔き、温存し、問題を内攻せしめたのは前任者たちではなかったか? この場合、ブレジネフのみならず、フルシチョフ、

そして誰よりも初代民族問題人民委員スターリンに最大の責任があることは言うまでもない。この章の筆者 (B. フォウクス) も一応そのことは認める。しかし結論は又しても同じ、すなわちブレジネフはソ連を連邦国家として繋ぎとめておくことに成功したというのである。その統治下で紛争や問題がなかったわけではないが、おおむね平穏に終始した背景には、これまた同じくブレジネフ特有の目配り、妥協があった。曰く、地方共和国の元首 (党第一書記) に地方出身者を据えるとともに、地域開発を進めて諸民族の平等化をはかった。これをフォウクス氏はネオ・コーポラティズムの妥協と呼び、その手法を巧妙な無作為とも称する⁽¹⁰⁾。

サッチャー氏の手法とは異なり、フォウクス氏は以上の一見成功をもたらした方法こそがあまたの腐敗を生んだ温床に他ならなかったと喝破している。ちなみに私も、ブレジネフ時代を停滞の一語で集約するのは不十分で、正確には腐朽と停滞の時代としなければならないと考え、『転機に立つ社会主義』でもそれを強調しておいた。そして腐朽は地方のみならず中央にこそ現れる。それは体制の絶頂部から最下層にまで及ぶ、まさに体系的現象である。それほどまでに体制疲労が進行していたのである。停滞を認めつつも、これを安定と言いかえ、無為無策をを指摘しつつ、それは堅実の別名であるとするのは何としても不当と言わなければならない。

なおこの章には宗教問題に触れた箇所がある。ただしここでも民族間の衝突もあるにはあったが概して宗教的色彩を帯びていて、政治的には大事に至らなかったという文脈で語られるのみである。紛争発生地に「ロシア人を追い出せ」の声があがったことは紹介しているが、フルシチョフの宗教弾圧政策がブレジネフの下でどうなったかはさほど明らかでない。ちなみにブレジネフ憲法 (1977年) はフルシチョフの弾圧に一定の反省を示したかのように「宗教的信仰と関連して敵意と憎悪をかきたてることは禁じられる」⁽¹¹⁾の一句を加えた。それによって諸民族と諸宗教の平和的共存が保障されたのでないことは、その後の経験がすべて物語っている。

4. デタント時代

ブレジネフ外交に二つの章が当てられている。米ソ関係を扱う第5章 (M. バウカー)、第三世界との関係を対象とした第6章 (M. ウェッバー)。特に目新しい、そして詳細な分析を与えるものではないが、われわれの同意しうる論点も少なくない。中でも、ブレジネフ外交において対・第三世界政策が米ソ・デタント政策に優先したことはないというのがそれだろう。それ自体いって当然のことに対する当然の認識と言って良いが、はしなくもブレジネフ外交の基本的性格を言い当てたものである。それというのも、ブレジネフ外交はフルシチョフ外交から生まれ、フルシチョフ外交はスターリン外交から生まれたという、いかんともしがたい歴史の反映である。むろんそこにはそれぞれの時代、人物を反映もした特徴にこと欠かないが、スターリン以来の根本原則、すなわち西側列強との間の status quo を何としても維持するとの姿勢は頑として継承されている。

かくしてブレジネフ期のソ連が、とりわけ70年代の後半にアンゴラ、モザンビーク、エチオ

ピア、アフガニスタン、南イエメン、ニカラグア、グレナダへと、相次いで触手を伸ばし、一見、強固な準・同盟国、少なくとも信頼に足る勢力圏を築き上げたかのごとくであるが、実はこれらの地域、いずれもアメリカの影響力がもともと少なかった地域であり、それに、ウォーターゲート事件やベトナム戦争で傷ついたアメリカの虚に乗じてソ連が進出したとの感があった⁽¹²⁾。しかし、一体なぜソ連はこれら地域への進出に精を出したのか？ アメリカの公式筋が当時しきりに喧伝した通り、ソ連はこれらを全世界共産化の足がかりにしようとしたのであるか？ それともソ連の公式宣伝通り、帝国主義・新植民地主義のくびきから諸民族を解放すべく真剣に努力したのであるか？

フルシチョフ時代には、非同盟中立路線をとって新旧植民地主義とたたかう姿勢を示す幾つかの新興独立国家を「民族民主国家」と規定し、これらが資本主義の道を経過することなく社会主義へ到達する可能性、いわゆる非資本主義発展の道を示すものであるとの論があった。ブレジネフ時代には更に一步を進め、これらの国がソ連型の社会主義を現実に志向しつつあるかの認識さえ浮上した。しかしながら本書の執筆者たちは、米ソいずれの公式論調にも懐疑的である。曰く、ソ連にはあらかじめ用意されたグランド・デザインといったものは全然なかった、理論的洞察はおろか組織的準備もまったく欠けており、いわばその場の行き当たりばったりの手法に終始したのである、僅かに政治的目的として追求されたのは、この地にアメリカの、それより中国の影響が及ぶのを防ぐ、ということくらいだった⁽¹³⁾。これはけだし反駁不能の至言だろう。

そして、反米国家、せめて中立的緩衝国家を創出しようとの努力は実を結ばなかった。現地の新興権力は時に「社会主義志向」のそぶりを示したものの、そのための現実的前提があるわけではなかった。何よりも独立後の経済困難と政治的内紛を抱えていた。こうした時、ソ連の物的援助は焼け石に水であり、政治的助言は一貫性を欠くか、例によって内政干渉めいたものとなった。そして、ソ連の介入が本格化すれば必ずアメリカの反撃を引き起こした。それは決して口先だけに終わることはなかった。ソヴィエト官僚の気まぐれとは異なって、そこにはテコでも動かぬウォール街の階級利害が絡んでいたからである。ソ連は後退し、慎重となる。こういういことを何回となく見せつけられた現地権力が、そしてやがては民衆までが、どちらをヨリ頼り甲斐のある存在と見なしたかは推測するまでもあるまい。かくして冷戦終結後、「イデオロギー外交」が弊履のごとく投げ捨てられ、ロシアは辺境の一広大な国家の地位に転落した。これを本章の筆者と共に、とにかくブレジネフ時代にソ連はアメリカの横暴を許さないだけの多極的世界を築いていたのだ⁽¹⁴⁾と慨嘆することができるであろうか。総じて、第二次大戦後のソ連が民族独立闘争と平和擁護闘争に与えた貢献について正確なバランスシートを描くことは難しい。ソ連崩壊なかりせばブッシュのイラク侵攻はなかったろう？ の嘆声があり得るとしてもである。

5. 発酵時代

そもそもブレジネフの政権は、フルシチョフの時代に見られたささやかな革新の潮流（スター

リン批判と上からの改革) を押しとどめる任務を担って登場した、と四半世紀前に私は書いた⁽¹⁵⁾。むしろ、スターリンが全面的に復権したわけではないし、スターリン的統治体制が復活したのではなおさらない。だが、こと経済改革に関する限り、最初期に導入されたコスイギン改革が後退していくにつれて、以前フルシチョフによって試みられた新機軸はおおかた忘れ去られ、伝統的な集権的物量計画の骨格に一指も触れることがなかったばかりか、改革の名において事実上うしろ向きの行政措置が為されるのが常だった。しかしながら、あらゆる革命が、そして反革命でさえが、破壊・断絶、そして継承・連続の両側面、或いは局面を持っているように、ブレジネフ反動もフルシチョフ改革の精神と実績を無にすることはなかった。ブレジネフ時代は、そのスタートをこそ一連の異端派弾圧で飾ったものの、やがて幾つかの改革思考を社会の各領域に育ていくことになる。経済面はともかく、政治思想の面ではそれが特に顕著であった。本書もこの点を強調する。第7章「イデオロギーの化粧 (hairdressing) の勝利か? ブレジネフ時代の知的生活再考」(M. サンドル)、第8章「ブレジネフと『発達した社会主義』、それは停滞のイデオロギーだったか?」(M. サンドル)、第9章「ペレストロイカへの道」(J. グッディング) がそれにあてられている。

まず第7章の冒頭でサンドル曰く、西側にはこの時代のソ連に関して、すぐれた頭脳、強靱な精神、そして立派な良心の持ち主は存在すべくもなかったとの誤解が流布している、しかし実際には、相当の自己抑制と若干の偽装とをもってすればほとんどの事を表明することができた時代である、表面的には静穏で、コンフォーミズムにどっぷりと浸かっているように見えるが、その裏側では多様な葛藤と創造性にあふれていた、これは同時代の知識人たちの証言に明らかどころであり、まさにこのような活動がペレストロイカの知的源泉となったことが知られるのである……⁽¹⁶⁾。

だから、フルシチョフ時代の雪解けと知的発酵に対比して、この時代の政治的反動が一連の異端派知識人を生み出したことは事実だが、彼らの活動に注目するのあまり、公認された知識人・知識社会の単調・無気力ぶりのみを見るのは公正を欠くであろう。雪解けは一定の逆転、停滞を示したかもしれないが、すべてが逆戻りしたわけではない。何よりも、時代がそれを許さなかった。ただに教育水準が向上して知識人の数が急増しただけではない。同じく高度に発達した工業化社会はいたるところで彼らの参画を要請していた。政治の領域もまた例外ではなかった。既にフルシチョフのころから、政策立案に関わる知識人集団が形成されつつあったけれども、ブレジネフ時代はこれを継承した。以上のことから、この集団独特のプロファイルが浮かび上がる。彼らは異端派と異なって公然と体制を批判することはできないし、批判しない。だから追放されることもない。逆に、体制内部に一種の「拠点」を確保している。その言動は時に体制が利用し、きわどいそれも体制の(内部の要人の)庇護を受けることがある。異端派が彼らを冷眼視する所以である。しかし彼らにも言い分がある。諸君は口先だけでは勇ましいことを言っているが、それが何かの役に立っているのか? 本当に体制を変えたいのであれば第二党創立宣言を発し、それを

実践してはどうか？

本書の執筆者は、このいわば半体制的知識人を本来の体制派知識人（歴史学の分野では例えばトラベズニコフやワガーノフなど）と厳密に区別して、中間派、ヨリ正確には「忠誠な反対派」と規定する。彼らは単なる右顧左眄の輩でないばかりか、たとえ用いられることはなくとも自立した思考様式を持ち、内容においては反体制・異端派知識人とさして変わらぬ信条の持ち主だからである⁽¹⁷⁾。代表的存在としてあげられるのは、シャフナザーロフ、アルバートフらであり、他にザグラディン、ゲラシーモフ、ルミャンツェフ、さらにポーヴィン、ボゴモーロフなどがいる。彼らは政府・党機関、研究機関、マスコミなどの一角にポストを持ち、時に冷や飯を食わされることもあったが、ほぼこの時代を通じて活動を継続し得た。彼らは党の新たな理論・イデオロギー、そして政策の進言者であり、党の要人、それどころか当のプレジネフその人のゴーストライターを勤めることがあった。彼らこそ、現実的・想像的思考能力を事実上喪失した党頂上に「代位」する存在だったのである⁽¹⁸⁾。

ところで、「半体制派知識人」が創造した新しい思考、カテゴリーに「発達した社会主義」なるものがある。明らかにフルシチョフ時代に行われた「共産主義の全面的建設期」に対置させられたものである。後者は勿論のこと、前者といえども基本的に一国社会主義論に立脚するもので、理論的には（むろん実践的にも）とうてい問題にならない。しかしながら、その提唱者がいかなる意図でこれを編み出したか、為政者たちがいかなる利用価値をそこに認めたかは一考に値しよう。なにしろ、この規定を最初に提起したのは、改革派をもって自認する政治学者・ブルラツキーであった。彼の「発達した社会主義について」なる論文は1966年12月21日の『ブラウダ』に載った。そのタイミング（フルシチョフ追放後わずか2年後）といい、掲載場所といい、最高指導部の承認、それどころか祝福を受けてのものだったに違いない。それはフルシチョフ主義、すくなくともその政治手法を一刻も早く振り捨てて、前任者の振りまいた実現不能の公約からみずからを解放しようとした新指導部にイデオロギー的弁明を与えるかに見えたからである。同じころ、これも名うての改革派・ブテンコの提起した社会主義＝独自社会構成体説も同様の役割を演じたことだろう。

このように、当規定は現状維持とその正当化に役立つものとして保守派に歓迎された。しかし、提唱者の意図は別のところにあった。それはソ連ではいまだ共産主義への移行を日程にのぼせるに足る発達をとげていないとの自己批判を内包していたのである。それは「発達した」ではなく、「発達していない」に力点を置く規定だった。あたかも「現実的なものは理念的である」との命題が、現実的なものの理念化を要求していたようなものである。かくして当規定は、経済の効率化、集約化、そしてこれらを実現するに不可欠な政治・社会の民主化を要求するものとなりえた。それが提唱者の真の意図だったのである。その後、当規定はいっそう「過激な」意義を与えられる。アンドロポフ政権になると、現状は発達した社会主義の初期段階にすぎない、それどころか、現状に見られるもろもろの欠陥は資本主義の遺物だけでなく、体制自身の所産でも

あるとの見方が現れる（ちなみにこの見方は、当時「発達した社会主義」規定をなお現状の過大評価だとして、わが国論壇の一部に行われたいわゆる「生成期論」をも乗り越えるものである。つまり、この論はソ連社会の発展を抑止する要因が体制内部にあって、再生産もされているという現実を事実上糊塗するものだったのである）。

かくして、ブレジネフ時代に発酵しはじめたもろもろの改革論は、一見、単なる規律強化路線をとるかのアンドロポフ政権や、およそ進歩的なものと一切無縁であるかに見えたチェルネンコ政権のもとでも勢いを失うことがなかった。私も当時それを意識しつつ、「改革論は実にこの域にまで達している！」と書いて⁽¹⁹⁾、フルシチョフを凌ぐ大規模な改革が日程にのぼることを予感させた。本書が、この時期の改革派を事実上ペレストロイカ路線を準備したものとして評価するのも良く理解できる。ただし、ペレストロイカの挫折とソ連崩壊という歴史的経験を踏まえて新たな検討を加えることも迫られていよう。改革派が行っていたのはソ連社会主義の再生ならぬ、その「体制転換」に向けた思想的営為であったとの評価さえ下される可能性もある。例えば、A. Brown (ed), *The Demise of Marxism-Leninism in Russia*, Palgrave (2004) には、このような論旨が見てとれるが、その紹介と分析は他日に譲る。ここでは「忠誠な反体制派」に対する現時点での私なりの評価を下すに留める。

彼らが全体として、そして少なくとも主観的には社会主義の再生を意図していたことに異論はない。とは言え、結局は次のような限界を脱することはできなかった。一つは、かれらが従来の公式イデオロギーにながしかの批判を加え、そこに権力がとうてい容認できぬ異端思想が盛られていたとしても、それらは遂に一国社会主義論の枠を超えるものではなかった。そしてそれぞれ権力が彼らを許容し、利用もできた根本的理由なのである。彼らは魚の言葉で語ることによって公式の教条に新しい理念を盛ったと自負したが、それを逆に換骨奪胎して自分に都合よくしてしまったのも官僚たちであった。彼らは所詮、終始、釈迦の掌中にあった孫悟空の運命を免れず、その意味では彼らもまた「御用学者」に留まったのである。むろん、その責任は彼らより、彼らの主人たちにある。だから第二に、彼らの発言はあくまで統治する側に立った、統治体制を改良するためのものであり、それを越えるものではなかった。一国社会主義論の基礎にある「代行主義」の哲学は頑として維持されていたのである。したがって第三に、後のペレストロイカの経過が示した通り、これを乗り越えるイデオロギーが生ずる可能性もまた奪われていた。彼らは主観的には社会主義の再生を願って、本来それを担うべき民衆的イデオロギーをもみずからが代位するとの自負を持ったかもしれない。だが実際に彼らが意図したのは、ソヴィエト官僚制支配に取って代わるソヴィエト権力の再建ではなく、既成官僚機構の内部に専門家・テクノクラートが確固とした地位を占めるようなテクノクラート社会の建設だったのである。本書の編者、M. サンドルはそれを率直に認めている⁽²⁰⁾。

6. 衰退時代

サッチャー氏はブレジネフ時代をソ連の黄金時代と言い切った。とうてい受容できぬ規定である。対外関係において米ソ間の緊張緩和を実現し、内政において安定の維持に成功を取めたように見えるのは事実だが、その裏面には別の様相が発展しつつあった。すなわち、米ソ間の絶え間ない交渉とは不断の核軍拡競争の謂いに他ならなかった。核軍縮と言いつつ、実際は双方が保有しうる核兵器の上限を定めることに過ぎず、双方とも、特に米側はこれをあえて核軍縮と言わず、核管理と称したくらいである。一切の協定なしに野放途の軍拡が為されるよりマシではないか？ しかしこのシニシズムの下で実際に達成されたのは「恐怖の均衡」に他ならず、均衡の水準は周知の論理によって絶えず吊り上げられていったから、恐怖の均衡とは「均衡の恐怖」に他ならなかった。ソ連の軍事的安全保障は確実に低下したのである。さらに、ソ連の安全を自国の軍備によって保障できるとの思考は、真の安全保障を諸国民の平和運動に求めるという思考を空文句たらしめることによって諸国民の失望をかき、ソ連はアメリカの核戦略に事実上追随しているとの感を深めた。それはまたしても確実にソ連の国際的信望を、したがって国際的威信を低下させたのである。ブレジネフ外交における顕著な失点、かのアフガニスタン侵攻は、この状況を格段に悪化させることにのみ役立った。

内政の安定なるものを一概に認め得ない理由は、ブレジネフの下でも権力闘争や頂上集団内での粛清・排除が絶えなかったという理由に基づくものではない。これらの現象は彼の治世前半にこそ頻繁に生じたが、後半に到るとブレジネフの個人権力とも呼びうる状況を生じた。その下で頂上およびその周辺の幹部は、ソ連始まって以来はじめて長い安らかな地位を保障されたかに見えた。ゴルバチョフが馬鹿馬鹿しいほど安定した人事政策と呼んだものである。だから、この面にだけ着目すれば、ブレジネフ時代を全体として安定の時代と呼ぶことは可能であるかに見える。しかし、問題はこの景観の裏面で何が進行していたかである。およそソヴィエト官僚制がすべての官僚制に共通する、というより、時には遙かにそれをも凌ぐ特権と腐敗の温床であることは周知のところであり、遠く20年代のネップ時代から「ソヴ・ブル (ソヴェト・ブルジョアジー)」の存在は民衆の口にのぼっていた。一部の観測を裏切って彼らが直ちに労働者権力を転覆し得なかったのは、転覆すれば彼ら自身の存在基盤が失われるという単純な理由に基づく。次にスターリンの時代に彼らが安定した地位を築けなかったのは、これまた単純に大規模な粛清と排除が荒れ狂っていたからである。それはソヴィエト官僚制の「原始蓄積」期とさえ呼べるものだったし、それを通じてソヴィエト官僚制は盤石の地盤を築いたかに見えた。

とは言え、官僚制があくまで労働者権力の上にそびえ立っていた限り、両者の間の矛盾はなくなる。フルシチョフ権力はこの矛盾を緩和しつつ、同時に官僚制の安定を作り出そうとしたものである。特権の一部は犠牲にされ、その分、労働者・民衆の実質的役割が向上するかに見えた。ブレジネフ権力とはこの傾向に対する反動だったのである。特権は甦り、労働者権力は侵害

された。かくして特権の増大は腐敗を増殖させ、一時は民主化と労働者権力の蘇生に向かうかの期待を裏切られた労働者の間では、労働規律の弛緩が進行した。労働者は官僚制を自力で克服するすべを持たなかった。官僚制も労働者を進んで労働させる能力を持たなかった。これは明らかに体制の行き詰まりを意味していた。先に、ブレジネフ時代末期を「危機寸前」と規定することに異を唱える論を見たが、体制の腐蝕を阻止する力を見出し得ない限り、その衰退と「自然死」、外部圧力（ソ連体制より高度の生産性を発揮する世界資本主義の圧力）を受けての体制崩壊は避けられなかったであろう。

以上のような認識を基本的に示しつつ、なお頂上集団がつかの間の「安定」と安逸をむさぼり続けたことを重視して、この時代をソ連体制の黄金時代ならぬ、「ノメンクラトゥーラの黄金時代」と規定するのは、歴史家のネクリッチである⁽²¹⁾。彼はまずノメンクラトゥーラ制なるものの本質を、その歴史的な成立事情に即して述べる。レーニンのコンミュン国家論をユートピア的としながらも、それはあくまでロシアの後進性、すなわち、労働者の文化的水準が低く、自己統治を実践する能力に欠けたことがその即時実現を不可能としたのであるとの（加えて過酷な内戦が権威的機関の速成を促したとの）認識を示す。それはけっしてスターリンの、「国家死滅論は役立たずの理論である」⁽²²⁾との認識に発するものではない。

ついでに言うならば、このように革命直後にして既に後の悪名高いノメンクラトゥーラ制が生じたように見えるのは事実だが、その「生みの親はレーニン、育ての親はスターリン」⁽²³⁾とする俗説には与し得ない。むしろネクリッチも与していない。たしかにこの制度は党機関による幹部任命制に始まるもので、1923年にかの幹部登録配置局（учраспред）を設置したことに起源を有するものの、実際には先に見たとおり、戦時共産主義時代に生じている。レーニンに責任があるかに見られる所以である。しかし、レーニンはあくまで幹部は大衆によって選ばれるべきだとの考えを捨てなかった。「大衆は、どんな小さくとも、彼らの活動の足どりをすべて知悉し、点検する権利を持たなければならない」⁽²⁴⁾との考えまでを彼が放棄した形跡はない。これに対してスターリンの考えは、12回党大会への組織報告に見られるように、レーニンにおける「知悉・点検」の主語「大衆」を党、具体的には幹部登録配置局に置き換えるものであった⁽²⁵⁾。要するに、レーニンが現実へのやむをえざる一時的妥協と見なしたものをスターリンは普遍的に最適の方式と見たのである。

そればかりではない。幹部任命制は経済・行政機関に限定されず、広く党機関にも及んだ。党規約に明記された選挙制の条項が公然、隠然のうちに侵害された。これが党の官僚主義化を憂える反対派、または将来の反対派によって早くから抗議を受けたことは良く知られている。それもことごとく実を結ばなかった。しかも幹部任命の制度自体は知られていても、その実体、すなわち国家的法律や党規約のいかなる条項を根拠とし、いかなる基準で運用されているかは尚更のこと、明らかにされることはなかった。ネクリッチも、ノメンクラトゥーラを本質的に党の権力装置としながら、党の上ですら立っていたと言う。それは絶大な権力と物質的特権を享受し、表面

的にこそ党の全面的信頼を享受する存在でありながら、実際には「究極の無法・無責任」を体現する存在となった⁽²⁶⁾。

ネクリッチのこの規定、厳密に言うとも問題がないわけではない。まず、本来は国家権力ではあり得ないところの政治的指導機関たる党が国家権力と癒着、ないしはこれを支配して国家的統治を「代行」する装置をソヴィエト官僚制と呼ぶならば、これとノメンクラトゥーラとの関係をどう理解すべきかとの問題が残るからである。むろん私自身、これを十分に理解しているわけではない。一応は、ソヴィエト官僚制にもっとも似つかわしい（その排他性を保証する）、そしてそれをもっとも安定的に機能させるための人事制度、として良いけれども、同時に、それがソヴィエト官僚制を機能不全に陥らせ、外部からの批判に傷つきやすい存在にしていることも認めるべきである。しかしこれもソヴィエト官僚制それ自体について言えることであって、特に積極的規定を与えるものではない。

次に、ノメンクラトゥーラ制の成立根拠・機能過程の「無法」性はともかく、機能結果に対しても「無責任」というのはどうか。ソヴィエト官僚制に固有の「肅清」を見れば、それが下部機構または個々の官僚の不首尾・無能の責任を上部機構がとらせる過程であることがわかる。ただし、ここで私が言う「肅清」とは、反対派・異論派、またはその疑いありとする者を追放・殺害することではなく（それを私は「排除」と呼び慣わしている）、上部の指令を首尾よく達成できなかった下部機構（員）を無能、怠慢、サボタージュ、はては「破壊活動」の名において断罪することを意味させている⁽²⁷⁾。だからそれは、本来上部、それも絶頂部の官僚が負うべき責任を下部に押しつけることに他ならず、ソヴィエト官僚制ならずとも見られる不当な「責任転嫁」、または単に「トカゲの尻尾切り」として知られる現象ではある。ただ、ソヴィエト官僚制においては、それが「党だけは絶対に誤らない」との原則で、官僚制の絶頂部、あわせて官僚制全体、すなわち体制そのものを保存する論理となっているのである。ネクリッチは特にブレジネフを念頭に置いて、最高指導部がすべての事柄を指導・統制すると言いながら、個々の首尾・不首尾には一切責任を負わず、責任はすべて個別国家機関に押しつけたと述べている⁽²⁸⁾。

さて、「黄金時代」を過ごしつつあるノメンクラトゥーラの実態をネクリッチに聴こう⁽²⁹⁾。まず、その数であるが、80年代に家族を含めて総数約300～400万人と見積もる。これは多分70年代について約300万人としたヴォスレンスキー⁽³⁰⁾とほぼ同じ基準で算出したものだろう。彼らの「身分的安定」ぶりは、在任期間の長さにも現れる。スターリン時代のそれが平均して2～3年だったのに対し、ブレジネフ時代はほぼ20年に及び、中にはこれを遙かに凌ぐ記録保持者が輩出する。例えば、イシコフは漁業大臣を39年間勤め上げた。ゴスプラン議長バイバコフは、前職の石油工業相を含めると通算して40年間、大臣の椅子に座っていた。彼らはその身分にふさわしい共通の人間の特徴を具える。曰く、互いの生活への卑しい羨望、貪欲、限りなき自尊心と法をも無視してはばからない不遜、そしておのれの存在を脅かしかねないすべての者への敵意、例えば異端派、不平派、批判的芸術家・文人、さらにはユダヤ人への。彼らには独特の社交

センスというものがあって、労働者・農民と交わるということはなかった、外国へ行っても自らの同類とのみ交歓するのだった。

そして彼らの「甘い生活」の諸相。西欧人に時として不信や敵意を示しつつも、彼らは競って西欧的生活様式を取り入れた。すなわち自宅内のプール、サウナ、自家用車とガレージ。彼らが専用の特別ショップを持っていたとすれば、彼らの住居は広さといい、調度といい、すべて特別であり、所在地まで特別だった。ランクによって区別される彼ら専用の住宅区域というものがあって、必要とあれば既存の住宅を取り払ってまで高官用住宅街を建設した。クレムリン御用達の特別医療施設があったのは知られているが、実は教育までがそうだった。50年代末から既に大都市に外国語で授業する特別学校があって、彼らの子弟は早くから特権的出自意識を育みつつあった……。

以上、ネクリッチが繰り広げる状況はわれわれにとって特に目新しいものではない。ヴォスレンスキーその他、おびただしい亡命者文献、また異端派文献・サミズダートの類で周知のものばかりである。だからここで問題となるのは、ネクリッチによって描かれたノメンクラトゥーラの「甘い生活」が即ち彼らの「黄金時代」の証しであるか否かである。彼の論文がいつ書かれたかも問題だが、それを収録したアフナージェフ編『ソヴィエト社会：その生成・発展・歴史的終結』の出版がソ連崩壊後の1997年で、ネクリッチが死去したのが1993年（それ以前、1976年に彼はアメリカに亡命している）とのことであるから⁽³¹⁾、最晩年、あるいはソ連崩壊以前のことかもしれないが、正確なところは不明である。しかしいずれにせよ、ブレジネフの時代を「ソ連の黄金時代」とする見方に比して妥当であることは間違いない。対象をノメンクラトゥーラに限定してではあるが、全体としてのソヴィエト官僚制の生成・発展・衰退・消滅の過程を照射しうるものとなっている。あたかもローマ帝国の全盛期がその没落を予兆していたように、ノメンクラトゥーラの饗宴は、もはや自らの力によってはソ連を救い得ないことを自覚した上でのものであるかに見える。そしてネクリッチは、自らの規定にかかる寓意を潜ませたのだと考えることができるかもしれない。しかし、サッチャー氏のソ連黄金時代論もまた同様であると言うことは到底不可能である。

注

- (1) Edwin Bacon, Mark Sandle (eds.), *Brezhnev Reconsidered*. Palgrave Macmillan, 2002. 以下、本文と脚注で「本書」と略記する。
- (2) 中村平八『ソ連邦からロシアへ』白桃書房、2006年、特に第4章「ソ連を殺したのは誰か」参照。
- (3) 山本恒人、井手啓二との共著『転機に立つ社会主義』世界思想社、1985年および拙著『ロシア革命・ソ連史論』窓社、2003年の終章「ドイッチャーのソ連観」参照。
- (4) (5) (6) 本書、58-59ページ。
- (7) Рой Медведев, *Личность и эпоха. Политический портрет Л.И.Брежнев*, Кн. I. Новости, Москва, 1991, стр. 99.

- (8) 本書, 25 ページ。
- (9) 本書, 211 ページ。
- (10) 本書, 68 ページ。
- (11) 宮沢俊義編『世界憲法集』第三版, 岩波文庫, 300 ページ。
- (12) 本書, 100 ページ。
- (13) 本書, 116 ページ。
- (14) 本書, 129 ページ。
- (15) 拙著『模索する現代社会主義』世界思想社, 1981年, 62 ページ。
- (16) 本書, 135-136 ページ。
- (17) 本書, 138-140 ページ。
- (18) 本書, 141 ページ。
- (19) 前掲『転機に立つ社会主義』66 ページ。
- (20) 本書, 181-182 ページ。
- (21) А. М. Некрич, Золотой век номенклатуры, в кн. Советское общество : возникновение, развитие, исторический финал. Том 2, Российский государственный университет, Москва, 1997, стр. 400-444.
- (22) ジョレス&ロイ・メドヴェージェフ, 久保英雄訳『知られざるスターリン』現代思潮社, 2003年, 359 ページ。
- (23) ミハイル・S・ヴォスレンスキー, 佐久間穆, 船戸満之訳『ノメンクラトゥーラーソヴィエトの赤い貴族』中央公論社, 昭和56年, 38 ページ参照。
- (24) レーニン「論文『ソヴェト権力の当面の任務』の最初の草稿」邦訳『レーニン全集』第27巻, 215 ページ。
- (25) 邦訳『スターリン全集』第5巻, 217-218 ページ参照。
- (26) А. М. Некрич, указ. соч, стр. 416.
- (27) 拙著『ソ連史概説』窓社, 1999年, 126-129 ページ。ちなみにスターリン時代以前における「粛清」は党員のみを対象とし, その資質・行動が党員にふさわしくない者, すなわち出世主義者や倫理・道徳的基準を満たさない者を党から除くことを意味しており, スターリン時代における「排除」とはもちろん, 「粛清」ともまったく異なっている。この点については, 藤井一行『民主集中制のペレストロイカ』(大村書店, 1990年), 242-245 ページに詳しい。
- (28) А. М. Некрич, стр. 406.
- (29) Там же, стр. 422-429.
- (30) ミハイル・S・ヴォスレンスキー, 前掲書, 164 ページ。
- (31) Cf. Roger D. Markwick, *Rewriting History in Soviet Russia*. Palgrave, 2001, pp. 291-292.